4 剛体のつり合いと回転

4.1 つり合いと保存則

- 力のつり合いと力のモーメントのつり合い

$$\mathbf{F} = \sum_i \mathbf{F}_i = \mathbf{0} \quad (101)$$

$$\mathbf{N} = \sum_i \mathbf{N}_i = \mathbf{0} \quad (102)$$

このとき全運動量 $\mathbf{P}$ と全角運動量 $\mathbf{L}$ が保存する

$$\dot{\mathbf{P}} = \mathbf{F} = \mathbf{0} \quad \leftarrow (43), (93) \quad (103)$$

$$\dot{\mathbf{L}} = \mathbf{N} = \mathbf{0} \quad \leftarrow (95) \quad (104)$$

(103) → 重心が等速直線運動、最初静止している場合は常に静止

(104) → 等速回転運動、最初回転していない場合は常に回転しない

- 式 (101) と (102) の両方が成立しているとき、 $\dot{\mathbf{L}} = \mathbf{0}$ は座標原点に依らない座標原点を $\mathbf{a}$ 平行移動すると、各力の作用点は $\mathbf{r}'_i = \mathbf{r}_i - \mathbf{a}$ 移動後の座標での角運動量 $\mathbf{L}'$ の時間変化は

$$\dot{\mathbf{L}}' = \sum_i \mathbf{r}'_i \times \mathbf{F}_i = \sum_i (\mathbf{r}_i - \mathbf{a}) \times \mathbf{F}_i = \sum_i \mathbf{r}_i \times \mathbf{F}_i - \sum_i \mathbf{a} \times \mathbf{F}_i \quad (105)$$

第1項はもとの座標系での力のモーメント $\mathbf{N}$ なので式 (102) より $\mathbf{0}$ 、第2項は

$$\sum_i \mathbf{a} \times \mathbf{F}_i = \mathbf{a} \times \sum_i \mathbf{F}_i = \mathbf{a} \times \mathbf{F} = \mathbf{0} \quad (101) \quad (106)$$

より $\mathbf{0}$ 、よって任意の $\mathbf{a}$ で $\dot{\mathbf{L}}' = \mathbf{0}$ が従う

⇒ 力のモーメントのつり合いを考える際に、座標原点は自由に選んで良い

4.2 剛体にはたらく重力

- 密度 $\rho(\mathbf{r})$ の剛体全体に重力 (z 方向、重力加速度 g) がかかっている場合
- 位置 $\mathbf{r}$ にある微小体積 dV の質量 dm

$$dm = \rho(\mathbf{r})dV \quad (107)$$

- 微小体積にはたらく重力 $d\mathbf{F}$

$$d\mathbf{F} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & -dmg \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & -g\rho(\mathbf{r})dV \end{pmatrix} \quad (108)$$

全ての微小体積にはたらく重力の合力

$$\mathbf{F} = \int d\mathbf{F} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & -g \int \rho(\mathbf{r})dV \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & -Mg \end{pmatrix} \quad \leftarrow (86) \quad (109)$$

- 微小体積にはたらく力のモーメント

$$d\mathbf{N} = \mathbf{r} \times d\mathbf{F} = \begin{pmatrix} x & y & z \end{pmatrix} \times \begin{pmatrix} 0 & 0 & -g\rho(\mathbf{r})dV \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -yg\rho(\mathbf{r})dV & xg\rho(\mathbf{r})dV & 0 \end{pmatrix} \quad (110)$$

全ての微小体積にはたらく力のモーメントの和

$$\mathbf{N} = \int d\mathbf{N} = \begin{pmatrix} -\int yg\rho(\mathbf{r})dV & \int xg\rho(\mathbf{r})dV & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -MgY & MgX & 0 \end{pmatrix} \quad \leftarrow (86)$$

$$(111)$$

- 全ての微小体積にはたらく重力は平行で合力が $\mathbf{F} \neq \mathbf{0} \rightarrow$ 合力の作用点 $\mathbf{r}_{\text{合}}$ が定義できる
 $\mathbf{N} = \mathbf{r}_{\text{合}} \times \mathbf{F}$ より

$$\mathbf{N} = \mathbf{r}_{\text{合}} \times \mathbf{F} = \begin{pmatrix} x_{\text{合}} & y_{\text{合}} & z_{\text{合}} \end{pmatrix} \times \begin{pmatrix} 0 & 0 & -Mg \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -Mgy_{\text{合}} & Mgx_{\text{合}} & 0 \end{pmatrix} \quad (112)$$

式(111)と比較して $x_{\text{合}} = X$ 、 $y_{\text{合}} = Y$ 、 $z_{\text{合}}$ は任意なので Z にとると

$$\mathbf{r}_{\text{合}} = \mathbf{R} \quad (113)$$

つまり **合力の作用点は重心 $\mathbf{R}$**

- 座標原点を重心にとる ($\mathbf{R} = \mathbf{0}$) と $\mathbf{r}_{\text{合}} = \mathbf{0}$ となるので $\mathbf{N} = \mathbf{0}$ 、つまり重力による力のモーメントが消える点が重心座標である。重心を支えれば剛体が回転しないことを表している。

4.3 斜めにたてかけた棒

- 質量 M 、長さ l の一様な密度を持つ棒を角度 θ ($0 < \theta < \pi/2$) で壁にたてかける (図8)

図8: 斜めにたてかけた棒。

- 地面との接地点 $\mathbf{r}_1 = (l \cos \theta \ 0 \ 0)$ に垂直抗力 $\mathbf{n}_1 = (0 \ n_1 \ 0)$ と摩擦力 $\mathbf{f}_1 = (-f_1 \ 0 \ 0)$ 静止摩擦係数を μ_1 とする

- 壁との接地点 $\mathbf{r}_2 = (0 \ l \sin \theta \ 0)$ に垂直抗力 $\mathbf{n}_2 = (n_2 \ 0 \ 0)$ と摩擦力 $\mathbf{f}_2 = (0 \ f_2 \ 0)$ 静止摩擦係数を μ_2 とする
- 重力の作用点は重心 (補足参照) : $\mathbf{R} = (l \cos \theta / 2 \ l \sin \theta / 2 \ 0)$ に $\mathbf{f}_g = (0 \ -Mg \ 0)$
- 棒が滑らない最小の角度 θ_m 、このとき壁と地面両方で最大静止摩擦力
- 未知数 5 ($f_1, f_2, n_1, n_2, \theta_m$) なので **5つ条件**が必要
- 力のつり合い $\mathbf{n}_1 + \mathbf{f}_1 + \mathbf{n}_2 + \mathbf{f}_2 + \mathbf{f}_g = \mathbf{0}$ の x, y 成分 : 2条件

$$x \text{ 成分 : } n_2 - f_1 = 0 \quad (114)$$

$$y \text{ 成分 : } -Mg + n_1 + f_2 = 0 \quad (115)$$

- 力のモーメントのつり合い (z 成分) 1条件

$$\mathbf{N}_1 = \mathbf{r}_1 \times (\mathbf{n}_1 + \mathbf{f}_1) = (l \cos \theta_m \ 0 \ 0) \times (-f_1 \ n_1 \ 0) = (0 \ 0 \ n_1 l \cos \theta_m) \quad (116)$$

$$\mathbf{N}_2 = \mathbf{r}_2 \times (\mathbf{n}_2 + \mathbf{f}_2) = (0 \ l \sin \theta_m \ 0) \times (n_2 \ f_2 \ 0) = (0 \ 0 \ -n_2 l \sin \theta_m) \quad (117)$$

$$\mathbf{N}_g = \mathbf{R} \times \mathbf{f}_g = (l \cos \theta_m / 2 \ l \sin \theta_m / 2 \ 0) \times (0 \ -Mg \ 0) = (0 \ 0 \ -Mgl \cos \theta_m / 2) \quad (118)$$

$$\Rightarrow (\mathbf{N}_1 + \mathbf{N}_2 + \mathbf{N}_g)_z = n_1 l \cos \theta_m - n_2 l \sin \theta_m - Mgl \cos \theta_m / 2 = 0 \quad (119)$$

- 垂直抗力と摩擦力の関係 (壁、地面) 2条件

$$f_1 = \mu_1 n_1 \quad (120)$$

$$f_2 = \mu_2 n_2 \quad (121)$$

- 以上より (補足参照)

$$\tan \theta_m = \frac{1}{2\mu_1} - \frac{\mu_2}{2} \quad (122)$$

$\mu_2 = 0$ (壁が摩擦なし) のとき、よく知られた結果に一致

$\mu_2 > 0$ の場合 $\mu_2 = 0$ に比べて最小角が減少 $\rightarrow$ 壁の摩擦によって倒れにくくなる

$\mu_2 > 1/\mu_1$ のとき、計算上 $\theta_m < 0$ となるが、これは式 (120) と (121) が同時に満たされない、つまり壁の摩擦が大きく $0 < \theta < \pi/2$ の任意の θ で棒が倒れないことを示している

4.4 垂直抗力の作用点

- 角度 θ の摩擦のある斜面上の質量 M の剛体 (図) の **回転** を考える
- 重力 $\mathbf{f}_g$ 、垂直抗力 $\mathbf{n}$ 、摩擦力 $\mathbf{f}$ 、座標原点 O を重心にとる

- 重力 f_g の作用点は重心 $R = 0$
 n と f の作用点を r とすると、 r は剛体と斜面の接地面のどこか
 $\Rightarrow r$ を力のモーメントのつり合いで決める

- 剛体が斜面上で静止している場合
力のつり合い： n と f の合力は重力 f_g と逆向きで同じ大きさ

$$f_g + n + f = 0 \Rightarrow n + f = -f_g \quad (123)$$

力のモーメントのつり合い

$$0 \times f_g + r \times (n + f) = 0 \Rightarrow -r \times f_g = 0 \quad (124)$$

n と f の作用点 r は重心にはたらく重力 f_g の方向

$\Rightarrow r$ は **重心の鉛直下にある剛体の接地点** (図 9(a))

r が剛体外部になる場合 (図 9(b))、式 (123) と (124) を同時に満たせない $\Rightarrow$ 剛体は回転
回転するかどうかは **剛体の形** (重心の位置と斜面との接地面の関係) で決まる

- 剛体が滑り落ちる場合
合力 $F \neq 0$ は斜面に平行に下向き
力のつり合い

$$f_g + n + f = F \Rightarrow n + f = -f_g + F \quad (125)$$

力のモーメントのつり合い

$$0 \times f_g + r \times (n + f) = 0 \Rightarrow -r \times (f_g - F) = 0 \quad (126)$$

作用点 r は $f_g - F$ の方向

F が斜面下向きなので $f_g - F$ は鉛直下向きより斜面上方向を向く (図 9(c) の点線)

$-F$ の寄与で、静止していると回転する剛体が回転せずに滑り落ちる場合がある (図 9(c))

図 9: 斜面上の剛体。